

追 悼



故 石川兵衛 先生 略歴

(大正15年5月8日～平成28年10月29日没)

<略歴>

大正15年 5月 8日生
昭和17年11月 愛知県立刈谷中学校(旧制)4年終了
昭和17年12月 海軍兵学校入学(第74期生)
昭和20年 3月 同上 卒業
昭和21年 7月 奈良県立医学専門学校入学
昭和26年 3月 同上 卒業
昭和27年 3月 奈良県立医科大学附属病院にて実地修練終了
医籍登録第144462号
昭和27年 4月 奈良県立医科大学内科学教室へ入局
昭和29年 7月 奈良県立医科大学助手(内科学第1講座)
昭和33年 8月 医学博士の学位授与
昭和35年10月 奈良県立医科大学助教授(内科学第1講座)
昭和52年 1月 奈良県立医科大学教授(内科学第1講座)
昭和57年 4月 奈良県立医科大学附属看護学校長併任
昭和59年 4月 奈良県立医科大学附属病院長併任
平成 2年 4月 奈良県立医科大学学長
平成 6年 3月 奈良県立医科大学学長退任
平成 6年 4月 奈良県健康づくりセンター所長
平成12年 3月 同上退職

<学会活動>

日本腎臓学会理事・名誉会員
日本内科学会理事・功労会員
日本透析療法学会(現:日本透析医学会)評議員
日本循環器学会評議員
日本心臓病学会評議員
日本脈管学会評議員
日本臨床生理学会理事・名誉会員
日本成人病(生活習慣病)学会評議員
日本老年医学会評議員
日本臨床スポーツ医学会理事

<学会運営(腎臓関連)>

第31回日本腎臓学会学術総会総会長
(昭和63年10月12日～14日 奈良県文化会館)
第11回日本腎臓学会西部学術大会大会長
(昭和56年5月15日・16日 奈良県文化会館)
第11回国際腎臓学会サテライトシンポジウム会長
(平成2年7月22～24日 奈良県新公会堂)

<受賞・勲章>

平成 6年 文部大臣表彰(体育功労)
平成13年 勲三等旭日中綬章

石川兵衛先生を偲んで

(福井大学腎臓病態内科学)

岩野正之

昨年10月29日に、本学会名誉会員の石川兵衛先生が90歳で急逝されました。2週間前に淡路島のご旅行から帰られ、次のご旅行の計画も立てておられたとのこと。まさに健康寿命を全うされたとは思いますが、先生のお優しい笑顔に二度と接することができないのは、痛惜の念に堪えません。薫陶を受けた弟子の一人として、深い哀悼と感謝の気持ちを込め、追悼文を書かせて頂きます。

石川先生は奈良県立医学専門学校2期生であり、奈良県立医科大学第1内科学教室の創成期にご入局され、後には同教室教授および奈良県立医科大学学長として、40年以上にわたり教室および大学の発展に寄与されました。まさに奈良県立医科大学の象徴的存在であり、育ての親のような存在でした。日本腎臓学会関連では、第11回日本腎臓学会西部学術大会会長および第31回日本腎臓学会学術総会会長としてご活躍をされています。また、初代の日本腎臓学会専門医制度委員会委員長として、現在の専門医制度の基盤を作られました。研究では、世界に先駆けてウロキナーゼによる線溶療法の研究に着手され、サイトカイン時代の幕開けとなるインターロイキン6の研究に先鞭をつけられました。また、腎臓関連以外でも、循環器領域やスポーツ医学領域で数多くの業績を挙げられています。スポーツ振興審議会会長、日本セーリング協会奈良県連盟会長、スポーツ医科学研究会会長、スポーツ栄養研究会会長などを務められ、平成6年には文部大臣表彰(体育功労)を受けておられます。

生前、石川先生は、ご自身の人格形成に最も影響を与えたのは、海軍兵学校における教育であったとお話になりました。当時の海軍兵学校長井上成美中将は、敗戦を予測して戦後の日本復興を担える人材育成を真剣に考えていたようで、軍事学以上に英語・数学・物理学などの基礎学力養成を重視し、体力・精神力の錬磨に加えて豊かな感性と国際的教養の涵養に力を入れられたそうです。石川先生は海軍兵学校第74期生でした。74期生は終戦直前に任官され、戦艦大和とともに一度は出征するものの、生きて日本の将来を担うためにと出撃直前に退艦命令が出されたそうです。確かに、石川先生のピンと筋が通ったお背中には、誇り高きネイビースピリットが感じられました。また、石川先生に最も影響を与えた医学者が故武内重五郎先生です。奈良県立医科大学は、武内先生が教育者としての第一歩を踏み出された場所でした。現在でも、数多くの武内門下生が日本腎臓学会で活躍中ですが、石川先生は門下生一同の兄弟子になる訳です。武内先生の厳しいご指導が臨床医、そして研究者としての石川先生を育て、武内先生の圧倒的な存在感は指導者としての石川先生の模範となっていたように思えます。

私にとっての石川先生は、厳しい父であると同時に慈しみ深い母のような存在でした。私が奈良県立医科大学で学ぶことになったのも、石川先生がおられたからです。一昨年他界した私の父は海軍兵学校第74期生であり、まさに石川先生と同期の桜でした。私が人生の進路を変更して医学部を再受験することを父に報告したときに、それならば石川先生がおられる奈良県立医科大学を受験するように勧められました。その後、無事に奈良県立医科大学への入学を許可されたときに、石川先生から一本の万年筆を頂戴致しました。その万年筆には、あの海軍兵学校の五省が金字で刻まれていました。



石川先生から頂戴した万年筆

五省

- 一. 至誠に悖るなかりしか。
- 一. 言行に恥ずるなかりしか。
- 一. 気力に缺くるなかりしか。
- 一. 努力に憾みなかりしか。
- 一. 不精に亘るなかりしか。

まさに石川先生は、この五省の言葉を胸に刻み、日々妥協を許さず、自己に厳しく、医道を実践されているような方でした。一方、いつも慈しみ深く患者さんと向き合われ、患者さんを優しく包み込むような先生の笑顔は最高でした。また、先生は学生に対しては大変教育熱心でした。学生食堂で先生にお会いすると、良い獲物を見つけたという感じで近づいて来られ、「腎臓の重さは何gですか?」「心臓の重さは何gですか?」「冠状動脈の分枝は全て覚えていますか?」と矢継ぎ早に質問を浴びせかけられました。昼食を取りながら口頭試験を受けているようで、日頃勉強不足であった私は冷や汗をかいていたことが思い出されます。

石川先生が主宰される第1内科に入局させて頂いたときに、先生は言われました。「内科医にとって重要なのは、技術を学ぶことではなく、内科の考え方を学ぶことです。そのためにも大学院に入り、研究するべきです。」

先生のお言葉を胸に、曲がりなりにも研究を継続できたからこそ、今の自分があるのだと思います。そして、私が福井大学腎臓内科教授に選ばれたときに、先生は我が事のように、喜んでくださりました。本当にありがとうございました。私は先生のご遺志を継ぐ弟子の一人として、これからも医学研究、臨床、そして教育に人一倍の努力を注ぎたいと思います。

石川先生、どうぞ安らかに眠りください。ご冥福をお祈り申し上げます。